Art in Hospital

患者と医療従事者に優しい病院環境をつくる

高度先進医療で患者を「おもてなし」

⑱国立国際医療研究センター病院（東京都新宿区）

新病院の外観。
ヘリの活用により東日本大震災の被災地などの遠隔地から患者を受け入れている

国立国際医療研究センターの起源は1871年、兵部省軍医寮に設置された附属病院にさかのぼる。以後は「陸軍病院」として活動した。

戦後、旧厚生省に移管。国立東京第一病院に改称する。1971年には国立病院医療センターに名称を変更。一説にはこの折、旧厚生省には同センターを米国立衛生研究所（NIH）に比肩する臨床・研究の一拠点とする構想があったという。

大きな転機を迎えたのが93年。国立療養所中野病院と統合され、国立国際医療センターが誕生する。我が国で4番目のナショナルセンター（国立高度専門医療研究センター）の発足だった。

「発足時の使命は感染症や国際協力、高度な総合医療を行うこと。特に初期は感染症を主体とした高度な総合医療を志向していました。昨今では糖尿病などの生活習慣病、肝炎を主体として大きく発展してきました」（原徹男副院長）

2008年には国立精神・神経センター国府台病院を統合。10年4月から独立行政法人に移行し、名称も現在の国立国際医療研究センターとなった。

「この時、全国に約260カ所ほどある三次救命救急センターを取得しました。もともと救急医療には97年から取り組んできた。各専門家による高度総合救急医療を24時間365日提供しています」（同）

12年からは全国の大学病院や国立がん研究センター、国立循環器病研究センターなどと並んで特定機能病院に認定された。センター病院の外来棟の大部分が昨年5月に完成。今年5月には全診療科が新棟に移行しての診療を開始する予定だ。

「新病院では患者さんの気分をやわらげるおもてなしができるホスピタリティーを目指しています。玄関から入り、右手に入ると視界が開ける。地下1階から3階までの吹き抜けは特徴的です」

20年には東京オリンピックが開催される。諸外国から多くの人が押し寄せる。国際医療協力を柱の一つとするセンター病院の役割も重大だ。

「これまではどちらかといえば、発展途上国への援助が主体でした。今後は東京に来る外国人に対応していかなければなりません。当院が先頭を切って国際的な医療水準を維持したい。どんな国から来た患者さんであれ、ストレスなく受診できる下地をつくろうとしているところです」（同）

感染症対策や糖尿病研究では世界有数の実績を誇る。今日も全国から患者が集っている。

18階屋上にあるヘリポート。
最大9トンまでの防災ヘリが発着可能

特別病室。
会議室や控え室、ソファなど充実した
アメニティーで療養生活をサポート

談話スペース。
窓からは新宿新都心の摩天楼や遠く丹沢山系も一望できる

中央棟アトリウム。
姉歯公也氏作製のモビール
（動く彫刻）のタイトルは「生命」

図書コーナー。
患者が自分の病気について情報を得たり、
有意義な時間を過ごすための場

集中治療室（ICU）。
最新のエビデンスに立脚したより質の高い医療の提供を目指す